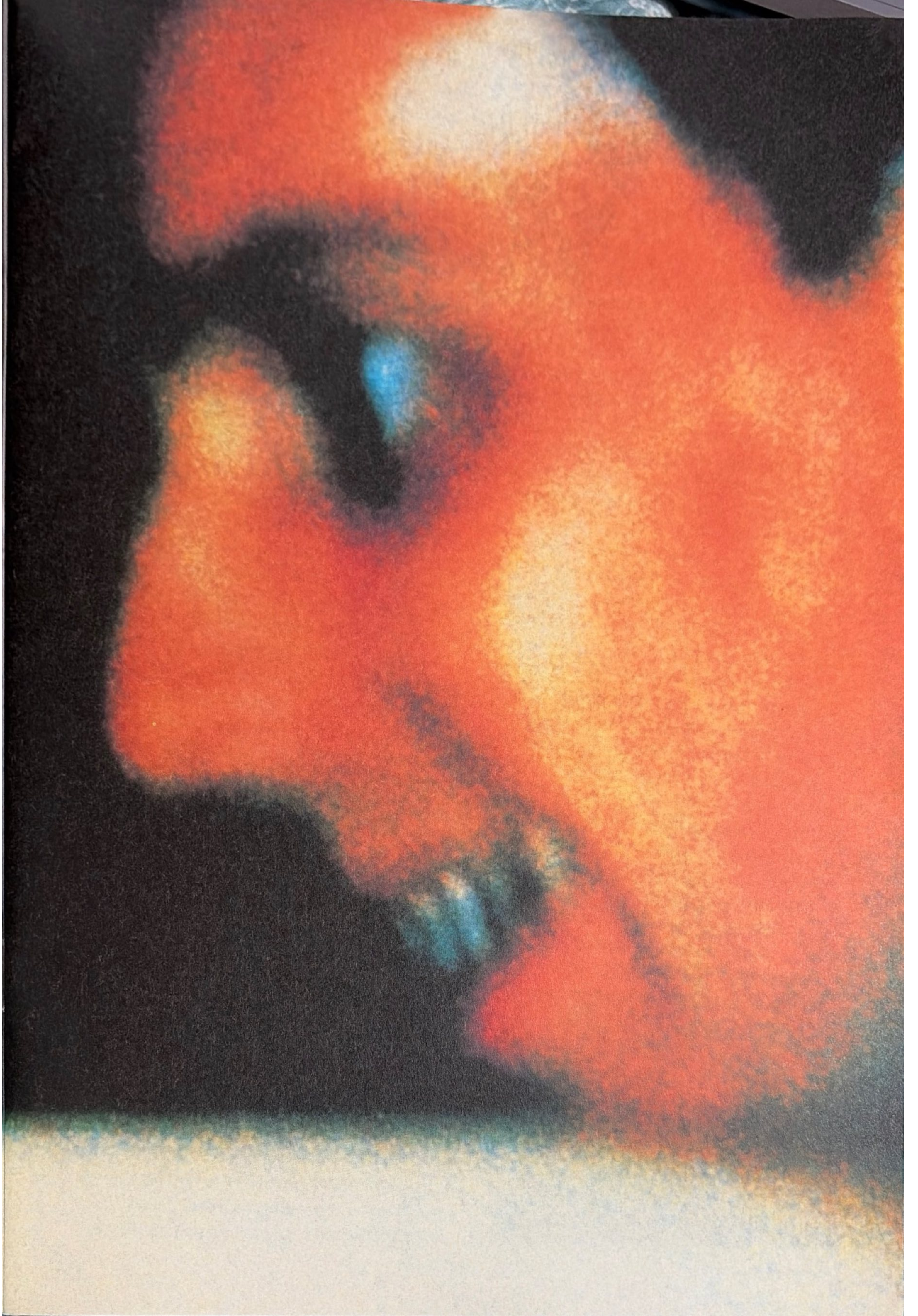
CINEMA RISE

NO.102

ジュリアン



CONTENTS



INTRODUCTION

解説

現在、世界で最も"恐るべき子供"の称号が似合う若き天才映画作家、ハーモニー・コリン。映画狂のスケートボーダーとして少年時代を過ごし、その鋭利な知性と膨大な知識量で伝説の写真家ラリー・クラークを驚嘆させ、彼の初監督映画『KIDS』の脚本を書いたのが弱冠19歳の時。ハードな日常を送るＮＹのストリート・キッズをリアルに描き、大きなセンセーションを巻き起こす。しかし所詮それはプロローグにすぎなかった。まもなくコリンは、97年の初監督作『ガンモ』で真の新世代の到来を映画界へともたらし、先鋭的な観客、クリエイターたちからの熱いリスペクトと、保守的な批評家連中からの激しい罵詈雑言を同時に浴びることになる。そして早くも放たれる、このストリート発・異端詩人の監督第二作目『ジュリアン』は、まさに21世紀型の前衛を用意する重い衝撃力を備えた傑作に仕上がった。

盲学校の教師をしている青年ジュリアン（ユエン・ブレンナー）は、飼い犬に異常な愛情をそそぐ祖母と、妻を亡くしたエキセントリックな父（ヴェルナー・ヘルツォーク）、レスラーを夢見る弟クリス（エヴァン・ニューマン）、未婚でありながら妊娠している姉パール（クロエ・セヴィニー）と暮らしている。

典型的なマッチョ思想の体現者でもある父の異常な言動と怒りの発作にたびたび晒される家族の奇妙な日常が、独特の映像感覚でスケッチされていく。精神分裂病のジュリアンは、聖性と残酷性を兼ね備えた無垢なる存在。学校で目の見えない生徒たちに献身的に尽くす一方で、家ではナチスを崇めるなど深い心の闇を抱えている。そんな彼の安らぎとなる存在が、姉のパールだ。彼女の宿している子供の父親は誰なのか、劇中で明確に示されることはないが、そこに悲劇が訪れる時、ジュリアンは現実との均衡を失う……。

この作品ではいわゆる説明的な描写が一切削られ、観客の解釈や思い入れによって、いくつもの表情を見せる。ぶっきらぼうに差し出される映像を丹念に読み取る作業に没入するうち、映画は我々を言語化不能な精神の深層まで連れていってくれるだろう。本作のプロデューサー、スコット・マコーレーもハーモニーの物語の伝え方についてこう語っている。

「ハーモニーは、キャラクターやシチュエーションを観客自身の視線で観てもらいたいと思っている。スクリーンに映し出される事柄に関して観客それぞれのリアクションをしてくれると信じている。『ジュリアン』の撮影時には率直にキャラクターの要素を説明している部分もあったが、ハーモニーは編集段階でそういうシーンをカットしていった。主人公のジュリアンは客観的に見れば精神分裂病患者だがハーモニーは彼を精神医学の見地や社会的見地から説明したり定義づけたりたりしないことに固執した。」コリンの映画は、卑小な日常を題材としつつも、それを越えた次元に到達する大きな広がりを持つ。しかもその根底には、あらかじめ人間関係に喪失感を背負わされた、ジェネレーションXよりさらに後の世代が抱く痛みのリアリティが流れているのも見逃せない。

ジュリアン役には、『トレインスポッティング』のスパッド役をはじめ、『アシッドハウス』などイギリスのユース・カルチャー系映画には欠かせない俳優であるユエン・ブレンナーを抜擢。ユエンが演じるジュリアンは彼の盲学校での介護者としての日々、妊娠中の姉のパールとの関係、威圧的で暴力的な父との日常生活から不安定な精神が魂の救いを求め徐々に過激に加速し、一気にショッキングな結末を迎えるに至るまで観客の心を釘付けにする。そして姉パール役には、『KIDS』以来のハーモニー作品常連であり、『ガンモ』では衣裳も担当した彼のミューズであるクロエ・セヴィニー。『ボーイズ・ドント・クライ』では堂々アカデミー助演女優賞にノミネートされた現在最も刺激的な若手女優である。また『ガンモ』同様、本作においてもハーモニーはプロの俳優と素人をミックスした異色のキャストを起用している。ユエン、クロエのほかに父親役には、ハーモニーが敬愛し、最も影響を受けた映画作家、ドイツの名監督ヴェルナー・ヘルツォーク（『アギーレ／神の怒り』『フィッツカラルド』）。また弟役には、バリー・レヴィンソン監督の『Liberty Heights』などで知られるエヴァン・ニューマン。そして、サン・アントニオ出身の盲目のアイス・スケーター、１１歳のクリッシーは、ハーモニーがテレビのドキュメンタリー番組『Inside Edition』で偶然見つけキャスティングをした。ジュリアンの愛情を示す重要な少女の役である。父親の腕のない友人役を演じるのは、カナダのサリドマイド被害者の会の会長アルビン・ロウ。盲学校の生徒役には様々な地域の盲目者の中から選んだ。

また、ハーモニーはトマス・ヴィンターベアの『セレブレーション』に感動し、撮影のアンソニー・ドット・マントルに撮影を依頼した。ジュリアンの内面を表現する新しいビジュアル手法を創り出したいと思った二人は、機動性の高い小型デジタルカメラで撮影し、その結果、本作には奇妙なアングルや、モノクロの夢のような夜のビジョンや、ハンドカメラだからこそ可能なリズミカルなカメラワークが散りばめられたものになった。編集にはマントルと同じく『セレブレーション』『ミフネ』のヴァルディス・オスカスドッチアが担当。デジタルビデオカメラの映像と静止画像やポラロイドで撮ったスチール写真とを組み合わせ編集した本作はハーモニーの考える"芸術的な"映像に満ち溢れた素晴らしく刺激的な作品となった。

プロデューサーは、『KIDS』と同じくケイリー・ウッズ。インディペンデント・ピクチャーズの設立者である彼は、『スウィンガーズ』の監督ダグ・リーマンや『スクリーム』の脚本家ケヴィン・ウィリアムスンなどの新鮮な才能を発掘し、見事ヒット・メイカーに育て上げている。先見の明には定評のある人物である。

STORY

ストーリー

激しいくせ毛に金の差し歯、シャツのボタンを一番上まで留めている青年ジュリアンが、森の中で亀と遊んでいる少年に近付いていく。「遊ばないか？」そう親しげな態度で話しかけるジュリアンだが、次の瞬間、いきなり少年に襲いかかる。ジュリアンは涙を流しながら祈りの唄を捧げる……。

ジュリアンは精神分裂病だ。自宅には、部屋でバレエを踊る妊婦の姉パール、階段を使ってレスラーになる訓練に励む弟クリス、古いフォーク・ソングを愛聴する威圧的な父、愛犬と戯れる祖母がいる。一見バラバラの彼らだが、共に夕食の席につく。

仕事に行くジュリアン。彼は学校で盲目者たちの手助けをする仕事に従事しており、ボーリングなどレクリエーションのサポートもする。一方、自宅の裏通りでは、パンツ一枚のクリスにホースで冷たい水をかけるサディスティックな父の姿がある。「男らしくなれ。家族に臆病者はいらん。」

産婦人科で検査を受けるパール。父親は誰かと訊ねる医者に、彼女は答えようとしない。自宅では、父がクリスに、金をやるから亡き妻が結婚式で着たドレスを着て一緒に踊ろうと迫る。「母さん似はお前だけだ。」そしてさっきまで神父に懺悔していたジュリアンは、自分の部屋で秘かにナチス崇拝の遊びに興じている。

半裸で電話するジュリアン。話相手は亡き母のふりをするパールだ。甘え声で奇妙な会話に耽る二人。

いつもの夕食の席で、ジュリアンはひたすら「カオス」を連発する自作の詩を披露する。父はそれをひどくけなし、愛する映画『ダーティハリー』について熱っぽく語りはじめる。

ジュリアンはアイス・スケートの選手を夢見る盲目の十一歳の少女クリッシーと出会う。二人は仲良くなり、学校のパーティーで手品師の余興を共に見る。

家族そろって教会へ。黒人牧師の説教を聴き、感動するジュリアン。家に帰ると、パールは好きなハープを弾く。それを父は激烈にののしり、おまけに彼女を淫乱呼ばわりしはじめる。ついにはジュリアンにまで当たり出し、バカであるお仕置きだと、自分で自分の顔を殴るように命令する。

ジュリアンとパール、そしてクリッシーが、アイス・スケート場にやって来る。パールはクリッシーと手をつないで滑り出すが、お腹の子を気遣って、クリッシーは他のスケーターと滑ることにする。クリッシーを見つめるジュリアン。そんな時、パールが転倒する。彼女は病院の救急治療室に運ばれた。子供は死産だった。ジュリアンは看護婦からシーツに包まれた亡き赤ん坊を受け取り、しっかりと抱きしめる。「僕のものだ。」そして突然病院を飛び出しバスに乗って、自宅に向かう。自宅に戻ったジュリアンは部屋のベッドに潜り込み、赤ん坊を抱きかかえながらうずくまるのであった。



PRODUCTION NOTE

プロダクション・ノート

映画界に革命を起こす“恐るべき子供”ハーモニー・コリン

映画界の“恐るべき子供”、ハーモニー・コリンの新作『ジュリアン』は、ハーモニーが言うところの21世紀の“ニュー・シネマ”に1歩近づいたワイルドで想像力に富んだ作品であり、精神分裂病患者をこれほどの説得力をもって描写し感動を呼んだ映画は今までになかったといえる。従来の意味での脚本を使わず小型デジタルカメラを使って撮影された本作は、個性的な登場人物たちによる日常生活の混乱と苦悩を表現し、観るものに驚嘆を与える。

ハーモニーの衝撃のデビュー作『ガンモ』(1997・ヴェネチア国際映画祭国際批評家連盟賞受賞)はガス・ヴァン・サント、マリリン・マンソン、ベルナルド・ベルトルッチなど多くのクリエイターからの賞賛を浴び、中でもベルトルッチはこの作品を「過去25年間において、映画という表現に革命を起こすことができる唯一の作品だ。」と絶賛した。ハーモニーは本作『ジュリアン』でも『ガンモ』同様、多様で大胆な手法を使い恐れを知らない実験を続けている。トマス・ヴィンターベアの『セレブレーション』のカメラマン、アンソニー・ドット・マントルと共に驚くべきアイデアを駆使し、静止画像やスーパーインポージング・ショット、ポラロイド写真を手持ちカメラで撮影したり、予期せぬ通行人が通る中を隠しカメラを使い俳優達の生のリアクションをとらえるなど観るものの心に焼き付く映像に満ち溢れた作品を完成させた。

“ハーモニーは『脚本のない映画を作っている。』とは言わなかった。『今までにない映画を作る。』と言った。”

1998年の冬に撮影が始まった本作の脚本は10ページ、124のシーンだけで構成されており、シーンの中には「強風の音」という短いものや、解釈困難な動きをしなくてはならないものなどもあった。撮影の前にハーモニーは語った。「これは、非伝統的な脚本である。シーンの順番はとても広い意味での骨格だ。僕はこれを物語の流れとしか使っていない。このプロジェクトの性質とその目標を達成するため、セリフはほとんど省いた。実際に撮影が始まったら、すべてが変わると確約する。書かれたシーンの順序は、特に意味はない。」

最初に脚本家として成功を収めていたハーモニーが、即興で映画を作るというのは皮肉に思えるが、このコンセプトは新しい映画制作の手法を創り出すという、ハーモニーのアーティストとしての立場とは何ら矛盾しない。映画が委員会によって作られ、書店に脚本のHOW TO本が出回る中で、彼のアプローチは過激で新



鮮だ。彼の作品はリアリズムと不条理、ユーモアと哀感をミックスさせ、日常の予期できないリズムをみなぎらせ、今までなかったキャラクターやシチュエーションを表現する。

主役のジュリアンを演じたユエン・ブレンナーが、この作品についてハーモニーと話をした時の事をこう語っている。「ハーモニーは僕に『脚本の無い映画を作っている』とは言わなかった。『今までになかった映画を作る』と言った。『ガンモ』があったから、彼の言葉を真剣に受けとめた。彼が言った通りのことをすると確信していたから。」本作を通じてハーモニーとの映画制作に感動したユエンは、最近生まれた娘に"ハーモニー"という名をつけたほどだ。

もちろん、通常脚本とは、監督や俳優を導くためだけはなく、映画の成功に責任があるプロデューサーや出資者を安心させるためにも存在する。インディペンデント・ピクチャーズのプロデューサーのケイリー・ウッズが会社設立後最初に製作した作品が『ジュリアン』だったが、新会社の最初の作品としてはリスクが高いと思われた。「もともとは『ジュリアン』には脚本があった。しかし、ハーモニーはシーンだけを残して、キャラクターのセリフを全部削ってしまった。俳優達と超リアリスティックに即興で作り上げたかったからだ。ハーモニーはオリジナリティに富むとても素晴らしいフィルムメーカーである。彼の作品は大胆かつ芸術的で、他に類を見ない。インディペンデント・ピクチャーズは、クリエイティブな作品に対してはリスクを負い、他の会社が敬遠するアーティストや題材を応援していく。『ジュリアン』が我が社の最初のプロジェクトになったのは、ハーモニーに、資金が集まったらまず最初に彼の作品を手がけると約束していたからだ。」

"役者にとって大変だったのは、『どうやって兄、弟、姉、父親、になればいいんだろう』ではなく『我々は家族なんだ。だったらどういう行動をするだろう』だった。"

ジュリアン役のユエンは、即興の演技に備えて、撮影が始まる4ヶ月前にロンドンからニューヨークに渡り、精神分裂病患者のための施設（New York's Wards Islands for the Criminally Insane）でアシスタントを務めた。ジュリアンのキャラクターの様々な側面を構築するため、4ヶ月間、週5日施設に通い、精神分裂病患者に芸術を教えた。さらに役作りのために非常に参考になったのは、ユエンが映画の設定そのままの家庭で育ったハーモニーの叔父に会った事であったという。ハーモニーの叔父エディーは、現在、精神分裂病患者としてクイーンズのクリードモア・インスティテューションに入所している。ユエンはこう語る。

「物語の根幹はハーモニーが話してくれたエディー叔父さんについての素晴らしくて驚きに満ちた話だった。ハーモニーに連れられて彼に会いに行った時、この役を演じる上で先の見通しがついたような気がした。彼は話好きのとても魅力的な人で、僕がキャラクターを演じる上でのベースを与えてくれた。」エディー叔父さんを訪問した後、ハーモニーはユエンに、彼の声が入ったカセットテープを渡し、ユエンはエディーの独特の話し方のリズムをつかむために撮影中そのテープをずっと聞いていた。

ジュリアンの姉、パール役を演じたクロエ・セヴィニーは語る。「『ジュリアン』は、『ガンモ』より難しい作品でした。全部即興だからです。しかしだからこそ逆にキャラクターのムードが上手く出せたのではないかと思います。それに私は監督としてのハーモニーを完全に信頼しています。」

また、ハーモニーの祖母であり、エディーの母親もこの作品に出演している。『ジュリアン』の撮影は、ほとんど彼女の家で行われた。ちなみにハーモニーは『KIDS』をこの家に住んでいる時に書いたそうだ。『ガンモ』同様、プロの俳優と素人をミックスしたキャスティングについてユエンは語る。「今考えると、まるで大きなお皿一杯のスープのようだった。11歳のクリッシーもハーモニーの祖母も私も、元々は全く接点がなかったが、ハーモニーは私達みんなを映画の世界に導き、家族同然にしてくれた。役者にとって大変だったのは、『どうやって兄、弟、姉、父親、なればいいんだろう』というのではなく『我々は家族なんだ。だったらどういう行動をするだろう』だった。」

"ハーモニーは撮影機材や音響のことについての話は聞きたがらなかった。ただ（撮影を）始めたがっていた。"

『ジュリアン』の製作はハーモニーがある日、ラース・フォン・トリアー監督（『ヨーロッパ』『奇跡の海』『ダンサー・イン・ザ・ダーク』）から電話をもらった事で急展開した。ラースがトマス・ヴィンターベア監督らと共に"ドグマ95"宣言を行った時、彼等は既にハーモニーがデジタル・ビデオカメラで新しい映画の撮影をする話を聞いていた。早速ラースはハーモニーに電話をして、『ジュリアン』を正式に"ドグマ"製作にする事を提案した。その提案にハーモニーは素早く対応し、アメリカ映画初の"ドグマ作品"としての規制を尊重しながら撮影を進めることにした。ポスト・プロダクションでセリフを加えたり、音を変えたり加えたりしてはいけないなどの規制に対してハーモニーは様々なアイデアを思いついた。例えば『ジュリアン』のサウンドトラックは、プッチーニあり、アメリカのフォークソングの大御所Dock Boggs（ドック・ボックス）あり、ドイツのエレクトロニック音楽の先駆者Oval（オーヴァル）ありなど、様々なものを織り交ぜたものであったが、音楽はカメラが回っ

ている間にプレイバックされ、映像はフリーズし、スーパーインポーズされ、ボイスオーバーは、撮影中にオフカメラになる俳優によって行われた。ユエンは本作においての“ドグマ”の規制は大きな問題ではなかったという。「何もかも『ハーモニー・コリン作品』だった。ハンドカメラも、自然光も、セットを使わない撮影も、すべてそうだ。しかし一つだけ言えることは、ドグマはハーモニーにルールの範囲で撮影していくという目標を明確に与えたということだ。」

『セレブレーション』で注目された撮影のマントルは、デジタルビデオカメラでの撮影を以前から勧められていた。しかし、コストの点だけでデジカメを使いたがる人ばかりだったのですべて断っていた。『ジュリアン』の話があった時も慎重に考えたと言う。

「デジタルカメラを使う事が、ハーモニーの世界を表現するのに適当だと感じなければ、デジタルカメラを使って撮影したくなかった。しかし、ハーモニーのプロジェクトについて知れば知るほどこの作品は『セレブレーション』に続けてする仕事にふさわしい事に気がついた。」

コペンハーゲンからニューヨークへやってきたマントルは、ハーモニーに対して抱いていた先入観を捨てた。ハーモニーは即興、直感に頼り、コンセプトや方向性を突然変えてしまうことがあるという。「ハーモニーと話をしたが、彼は撮影機材や音響についての話は聞きたがらなかった。ただ始めたがっていた。一番大変だったのは、彼のために“カメラ1”とか“カメラ9”などを選ぶのだが、彼が求めているものかどうか、つねに不安だったという事だ。それも撮影が進むと直感でわかるようになったが、そうできるようになったのは撮影が進んでからだ。つまりハーモニーを型にはめることは誰にも出来ないということだ。『セレブレーション』は、家族が徐々に崩壊していく話なので、映像も徐々に破壊していこうと思った。これは、『ジュリアン』の撮影の仕方にも似たところがある。生きた感情をスクリーンに現すためには映像も変化していかなければならないと思った。主役が精神分裂病の可能性があるというコンセプトだったので、その主役の視点は複数あるという事を表現したかった。今、撮影が終わってみると、主人公の精神状態が上手く反映された映像が撮れたのではないかと思う。」

『ジュリアン』の撮影は、クィーンズ、ヨンカーズ、ハーレム、ニュージャージーで、25日間にわたって行われた。ハーモニーは最初から、撮影に小型の監視カメラを使う可能性を考えていた。カメラをロケ現場や俳優の体に取り付け、ドキュメンタリーの隠しカメラのような映像を撮ろうと思ったのだ。小型の監視カメラは、子供服店や公共のバス、教会の懺悔室などの撮影時に使用された。ニュージャージーのバプチスト教会は実際の礼拝に出席している人達と撮影をさせてくれた。ハーモニーは俳優達に、キャラクターになりきって、予期せぬ事態にも対応できるよう求めた。

“86時間のフィルムを12週間で90分に編集しなくてはならないと聞いた時は絶対無理だと思った。”

結局9台のカメラを使い、さまざまな方法で撮影したフィルムは、膨大な量になった。この膨大なフィルムを編集したオスカスドッチアはこう語る。「ニューヨークに到着するまで、どのぐらいの量があるか知らなかった。聞くのを忘れていたのだろう。86時間のフィルムを12週間で90分に編集しなくてはならないと聞いた時は、絶対無理だと思った。酸素マスクなしでエベレストに登るような気分だった。でも、エベレストに登る時も、まずは最初の1歩からだ。」　オスカスドッチアは、『セレブレーション』の時と同じような方法で編集していくことにした。彼女はこう言う。「映画の展開を知りたくなかったので、編集を始める前に86時間のフィルムを見ることはしなかった。最初の日には、シーン1を編集し始め、そのシーンが終わったら、次のシーンというふうに編集していった。キャラクターが何をするのか知らない方がいい。観客と同じように驚きたい。」

この映画の編集についてオスカスドッチアは、ある難しいシーンを覚えている。「そのシーンは、3日前から編集していた。どうやってもうまくいかず、落ち込んでいた。それは6台か7台の隠しカメラを使ったシーンで、ハーモニーやアンソニーから、素晴らしい撮影だったと聞かされていたシーンだ。そのシーンから何も削る事が出来ずにいた。彼らの期待を裏切るような編集をしてしまったらどうしよう…という思いだった。私はハーモニーにこう言った。『このシーンはうまく編集できない。』すると彼は、『好きにしていいんだ。芸術的なものを作ってくれ。』と言った。それがハーモニーのよさだ。私に編集する自由を与えてくれた。でもだからといって彼がいい加減なのではない。彼と私の心が、ピッタリ一致したのだ。」

全く新しい“デジタル世代の印象派”映画の誕生

最後の仕上げの段階で、ハーモニーとマントルは、『ジュリアン』のデジタル画像をフィルムにするのに、全く新しい手法を使うスイス・エフェクツのパトリック・リンデンマイヤーに依頼した。スーパー8の映像の質感が、そのままフィルムに活かされる様に、ハーモニーは35mmフォーマットではなく、16mmフォーマットにコピーし、それを光プリンターで拡大した。こうすることによって、従来のテープからフィルムへのコピーとは全く違った質感が出た。

こうして完成した『ジュリアン』は、ニューヨーク映画祭で上映された後、ヴェネチア映画祭ワールドプレミア、トロント国際映画祭北米プレミアで上映され、“恐るべき子供”の全く新しい“デジタル世代の印象派”映画として絶賛された。



COLUMN 1

現代映画の最前衛に立つノイズまみれの〈おとぎ話〉

ハーモニー・コリンはエッジを目指す。脚本デビュー作『KIDS』(95年)ではドラッグやエイズと戯れるＮＹストリート・キッズの狂騒を描き、監督デビュー作『ガンモ』(97年)では竜巻で廃墟化したオハイオ州ジーニアの田舎町の脱力的日常を綴った彼は、今作『ジュリアン』で、特定されない地域における薄ら病みした家族の肖像を創造する。コリンが一貫して目を向けるのは、通常で健全とされる絆は確実に崩壊しつつも、奇妙な均衡に支えられた共同体の風景だ。『KIDS』の少年少女たちは共に刹那の生を燃焼することで精神的同志となり、『ガンモ』の住人はゴキブリだらけの町から誰も出て行かず呑気に暮らしている。『ジュリアン』の家族は明らかに歪んでいるが、歪んだままでとりあえず成立している。かくして映画内世界は、オール・ロケでとらえた現実空間でありながら、現実社会のモラルを超越した場所としてファンタジックな様相を帯びていく。コリンによってストリートは神話空間へと昇華されるのである。

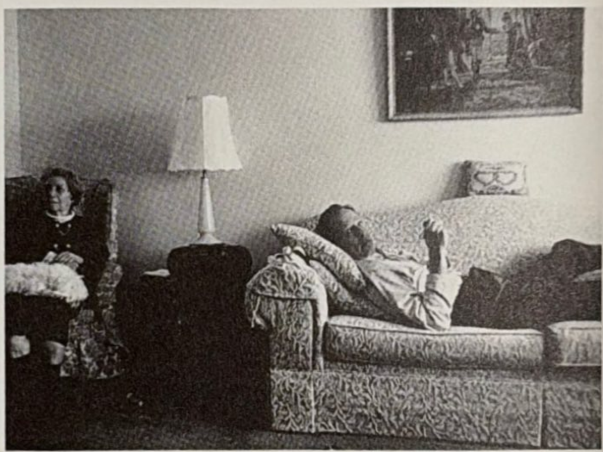
マイノリティ蠢くエッジ・エリアから直に立ち上げられたコリン式神話空間において、とりわけフリークスは、イノセンスを具象化する特権的存在として扱われる。『ジュリアン』の精神分裂病青年ジュリアンは、盲目者サポートの仕事に精を出し、牧師の説教に涙する一方で、理由なく少年を襲う残酷性も兼ね備えている。全く散文的だった『ガンモ』(あるいは98年の小説「クラックアップ」)に比べ、本作がわりあいリニアなストーリー・ラインを感じさせる結果になっているのは、この“特権的存在”を構造の中心に置いたことで求心性を持ったためだろう。

そんなジュリアンの、最も渇望しているものが〈母性〉である。母のない彼は、クロエ・セヴィニー演じる姉パールを「ママ」と呼び電話で話す。パールは妊娠中だが、誰が胎児の父親なのかは説明されない(ジュリアンの証言はアテにならないのだし)。やがて死体となって産まれてくるその赤ん坊を、ジュリアンはしっかりと抱きかかえ帰宅し、ベッドのふとんに全身を包む。まるで自分ごと母親の胎内に戻ろうとでもするかのように。

どこか冥界を連想させる冒頭の森に出現する亀といい、『ジュリアン』には今までの作品以上にシンボリックな要素が散見され、観る者の解釈によって幾通りもの物語が紡ぎ出され得る映画となっている。その記号の奥に広がる豊かな形而上性、イメージの予感が、現代の悲痛な〈おとぎ話〉との印象を一層強くするのだといえよう。

むろんコリンの〈おとぎ話〉には、凡百のリアリズム映画よりも遥かに生々しい〈リアル〉が横溢する。まず彼は執拗に“本物”にこだわる。セットなどは当然使わず、実際の身体障害者に出演を依頼し、ジュリアンを演じるユエン・ブレンナーには精神科のリハビリセンターで実際に六週間働くことを要求する。これらはヴァーチャル志向が進むハリウッド映画への非常に明快な反旗である。しかしだいたいの場合、このテの姿勢は単なる素朴で時代錯誤な表現に陥りがちなのだが、コリンがそうならないのは、凝りに凝りまくった独特の映像構築法があるからだ。『ガンモ』でも8ミリフィルムやヴィデオ、スチールなどのコラージュで白日夢にも似た眩惑的な映像世界を見せていたが、『ジュリアン』ではもっと過激化され、何台ものデジタルヴィデオで撮った映像を8ミリへ、さらに35ミリへと二回落とし、静止画像やスチールを加え、アシッドな映像処理も大胆に施す。まさに映像そのものがカオスでありノイズとなる。そこにクラシックからラップ、電子音までの雑多な音楽を絡めることで、コリン流の〈リアル〉なポエジーは完成する。

つまり、様々な人工性で再構築された世界でこそ切実に滲み出るナマのエモーション。これぞ74年生まれのコリンが放つ、サンプリング／リミックス世代の〈リアル〉なのだ。先述した小説『クラックアップ』が直接的な苛立ちに満ちつつ、言葉自体はほぼ他文献の引用から成り立っていたように、コリンの表現



には最年少の部類に属する映画作家ならではの同時代性が極めてトガった形で顕在している。コリン自身はいわゆるストリート・カルチャーの範疇に入れられるのを嫌うらしく、そもそも神話志向なんだから普遍性に到達したいと願うタイプの作家のはずだが、にもかかわらずギャロやタランティーノに負けぬほどポップ／アート・マニアの彼は、典型的なポップ・カルチャーの子供でもあろう。MTVに嫌悪を示しつつ、ソニック・ユース「サンデイ」のヴィデオ・クリップをマコーレー・カルキン出演で撮ってしまう矛盾がコリンの核であり、その矛盾を体現して初めて、彼の映画はスクリーンを斬ったら血の噴き出すような脈動を手に入れるのだ。

今作『ジュリアン』は、デンマークの映画運動体「ドグマ95」の一本として撮られたものだが、映画的原点への回帰とのニュアンスが強いドグマの域を超えて刺激的である。二一世紀に向かう映画の最前衛はここにあると僕は断言したい。

森 直人(モリ・ナオト／映画批評家)

COLUMN 2

リアルということ――ハーモニー・コリンの詩的真実

ハーモニー・コリンについて思いを馳せるとき、ぼくの頭の中をいつもよぎるのが、『ハート・オブ・ダークネス』(フランシス・F・コッポラによる問題作『地獄の黙示録』の、狂気とも言える凄絶な撮影現場を捉えたドキュメンタリー）のラストでコッポラ監督が映画の未来を語っていた言葉だ。そこで彼は、ビデオなどのテクノロジーの進化により、いつか映画は誰にでも撮れるようになるだろうと予言している。ある日、アメリカのどこか田舎町から天才少女が現れて、自分の周りにある光景をカメラに収め、とんでもない傑作を作り上げてしまう。そんなことがきっと起きるに違いないだろうと。

20世紀もあと数日で終わろうとしている（あるいはこれを読んでいるあなたはもう21世紀を生きているかもしれない）今現在、コッポラの予言があまりに正確に的を射ていたことに、慄然とさせられないだろうか。全編をハンディカムで撮りきった映画は今や珍しくもなんともないし、今後ますます増えていくことは目に見えている。そして映画史的にも稀なほど、創作面における圧倒的ピークを迎えていた巨匠の言葉を裏づける「少女」がハーモニー・コリンというひとりの少年のような青年として具現化したことを、われわれはもう既に知っている。

彼ハーモニーは、リュミエール兄弟が映画の映写技術を発明した1895年からちょうど100年後の‘95年に発表された『KIDS』(日本公開は翌'96年）によって、突如不意打ちのようにしてわれわれの前にその姿を現した。写真家ラリー・クラークとの運命的な出逢いを経てまだ十代のうちにシナリオを執筆した同作、そしてあまりに衝撃的だった監督デビュー作『ガンモ』、そして今われわれの前にあるこの最新傑作『ジュリアン』--。独自にして非の打ち所のないこのフィルモグラフィを通し、彼が表現しようとしたものは一体なんなのか。

無理矢理一言で言うなら、ハーモニーが映画を通して行っていること、それはリアリティの追求である。かつて誰もやらなかった方法論を駆使しつつ、「リアルであること」に徹底的に、神経症的なまでにこだわり続けている。『KIDS』においていったん完璧に仕上げられたプロットが『ガンモ』においては確信的に捨て去られているのはなぜか。それは、どれほどリアリスティックな描写が含まれていようと、その映画がプロットという厳然たる人工物によって支配されている限り、それはやはり「リアルである」とは言いがたいからだ。

そこでハーモニーは、『ガンモ』においていきなりドキュメンタリーとドラマの垣根を壊しはじめる。俳優は、彼のミューズたるクロエ・セヴィニーなどの例外を除いてすべて素人を使い、セットアップしたシチュエーションに彼らを投げ込んで素のリアクションを捉えるというラジカルな試み。そうすることで現出される瞬間的な真実＝奇跡は、前後の脈絡を無視して配置され、独自の画像処理やサウンド処理が施されてコラージュされる。しかしながら、そんな映画の解体と再構築とも言える作業を経て、ハーモニーが追い求めているのは、現実の再構築などではなく彼が言うところの「詩的なビジョン」である。これまで彼を映画作りに駆り立ててきたキートン、ブレッソン、ヘルツォーク、ファスビンダー、ゴダール、小津らの映画がそれぞれ独自の詩的なビジョンを体現してきたように、それはあくまで作家個人のパーソナルな視点からしか生まれない。

監督第2作目となる『ジュリアン』においてハーモニーは、全編をデジタルの画像で捉えながら独自の審美的な領域に踏み込んでいる。そしてそこに写しとられた無垢なる人間たちのエモーショナルな輝きに目を奪われるとき、きっと誰もが気づかされるはずだ。映画における革新は決してテクノロジーなどからは生まれえず、たとえばそれは、ひとりの少年や少女らによる、あまりに眩しく新鮮な一個の視点からであることを。

稲田浩（イナダ・ヒロシ／CUT副編集長）







HARMONY KORINE

ハーモニー・コリン／監督・脚本



1974年、カリフォルニア州ボリナス生まれ。5歳の時、家族とともに東海岸に移り、6歳から高校を卒業するまでナッシュヴィルで過ごす。卒業と同時にニューヨークへ出てきて祖母と暮らし始めた。父親が映画好きだったため、他の子が宿題をやっているような時間に家族揃って映画館で映画を観ていた彼は映画青年となり、18歳から21歳までの間になんと5000本の映画を見たという。

ある日セントラル・パークで何気なく写真を撮っている時に偶然出会ったのが、写真家のラリー・クラーク。この出会いで息投合したは二人は、ハーモニーの脚本をラリー・クラークが監督することによって「KIDS」(95) が誕生した。公開直後センセーションを巻き起こした「KIDS」は1996年インディペンデント・スピリット賞で最優秀脚本賞にノミネートされた。1週間で脚本を書き上げた弱冠19歳のコリンは一躍天才児として注目を浴びることになる。

その後、脚本を兼ねた「ガンモ」(97) を初監督。1997年ヴェネチア国際映画祭／国際批評家連盟賞、1997年ジジョン国際映画祭／審査員特別賞を受賞。ベルナルド・ベルトルッチやガス・ヴァン・サントなどそうそうたる映画監督に衝撃を与えた。

「人生観を変えた映画はヘルツォーク、カサヴェテスやゴダール。チャールズ・ロートンの『狩人の夜』だ」と語り、その独特の映像表現ときわめて感覚的でありながら、裏側にある緻密なロジックによる構築は若手のクリエイターの中でも突出した存在となった。

「すべては一つの芸術なんだ」と語るハーモニーは映画だけでなく、パワーズ・ブラザーズというバンドを組んだり、俳優として「グッド・ウィル・ハンティング／旅立ち」(97) に出演したり、小説「クラックアップ」(ロッキング・オン刊) を執筆したり、ギャラリーでの展覧会などその才能はとどまるところを知らない。

「自分の人生や冒険を語るには，自分で書くしかない。もちろん本は読むし、共感を覚えることもあるけど、それは僕の話ではない」と語る彼は、すべての既成概念を排除し、どのジャンルにも属さない“ハーモニー・コリン”の映画を作り続ける。今後は、ソフィア・コッポラ初監督作品「ヴァージン・スーサイズ」(99) で撮影を担当したエドワード・ラックマンの監督する「Ken Park」(00) で脚本を担当する話がある。

＊『KIDS』…1995年製作。写真家ラリー・クラーク初監督作品。ニューヨークのストリート・キッズであるティーンエイジャーたちのセックスとドラッグに明け暮れる日常を描いた作品。公開時には全世界の若者の支持を集めた。この作品で脚本を手がけたハーモニー・コリンは、そのショッキングな内容とともに人々に強烈な印象をあたえた。またHIV感染者の主人公をクロエ・セヴィニーが演じている。

＊『ガンモ』…1997年製作、ハーモニー・コリンの監督デビュー作品。竜巻に襲われたオハイオ州の町を舞台に、野良猫を捕獲して小銭を稼ぐ少年たちや、暴力にはけ口を見出す若者たちの虚無的な日常の姿がコラージュのように綴られている。ガス・ヴァン・サントが絶賛した。無気力な時代の空気をありのままに切り取った、観るものに衝撃をあたえる作品。もちろん脚本もハーモニー自身である。



CAST

キャスト



ユエン・ブレンナー／ジュリアン

本作品「ジュリアン」で主人公の精神分裂病の青年ジュリアンを演じているユエン・ブレンナーは、映画のみならず演劇、テレビなど数多くの作品で活躍している。ギリース・マッキノン監督「Conquest of the South Pole」(90)、クリスティーン・エドワード監督「As you like it」(92)、マイク・リー監督「ネイキッド」(92)、ダニー・キャノン監督「ジャッジ・ドレッド」(94) を経て、ダニー・ボイル監督「トレインスポッティング」(96) のスパッド役で一躍名が知られるようになった。また、エジンバラのトラバース劇場で上演された「トレインスポッティング」ではレントン役として出演し、ロンドンのブッシュ劇場での公演でもレントン役で出演。その後ジェズ・バターワーズの「Mojo」(97)、サイモン・ドナルドの「Life of Stuff」(97)、ポール・マクギガンの「アシッドハウス」(98) に主演している。今後はガイ・リッチー監督「スナッチ」(00)、マイケル・ベイ監督「パール・ハーバー」(01) ではハリウッドに進出、ベン・アフレック、ケイト・ブランシェットらとの共演が控えている。



クロエ・セヴィニー／パール

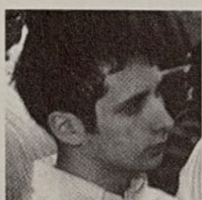
1974年11月18日生まれ。公開当時様々な議論を呼んだラリー・クラーク監督、ハーモニー・コリン脚本の「KIDS」(95) でデビュー。続く「トゥリーズ・ラウンジ」(96) でスティーヴ・ブシェーミの相手役を演じた。「KIDS」がきっかけで公私ともにパートナーとなったハーモニー・コリン初監督作品「ガンモ」に出演。この作品では衣装デザインも担当した。またストリートのファッションリーダー的な存在で、着ている服がデザイナーにコピーされ、半年後のニューヨーク・コレクションに登場するといわれるほどファッションセンスには定評がある。その後アカデミー賞受賞監督フォルカー・シュレンドルフの「パルメット」(98) でウッディ・ハレルソン、エリザベス・シューと共演し、ホイット・スティルマン監督作品「ラストデイズ・オブ・ディスコ」(98) に出演。またキンバリー・ピアース監督「ボーイズ・ドント・クライ」(99) で、今年のアカデミー賞最優秀助演女優賞にノミネートされ若手のトップ女優の一人として数えられるようになった。その後「A Map of the World」(99) ではシガニー・ウィーバー、ジュリアン・ムーアと共演、メアリー・ハロンの「アメリカン・サイコ」(00) ではクリスチャン・ベールと共演し、大作・話題作に続々と出演が決まっている。また「Hazelwood Jr. High」では初めての舞台も経験している。本作では主人公ジュリアンの姉でバレエダンサーの妊婦のパール役を演じている。



ヴェルナー・ヘルツォーク／父

ヴェルナー・ヘルツォーク（本名ヴェルナー・H・スティペティク）は、1942年9月5日、ミュンヘンで生まれた。ババリアの山間の村で育ち映画やテレビや電話とは無縁の子供時代を過ごしていたが、ミュンヘンの大学で演劇を学び、その後アメリカで映画を学んだ。帰国後プロダクションを設立し、短編を監督。67年に長編第1作「生の証明」を発表。その時から、40本以上の映画を製作、脚本、監督し、12冊以上の本を書き、多くのオペラを監督している。主な監督作品は、「小人の饗宴」(70)、「闇と沈黙の国」(71)、「アギーレ/神の怒り」(72)、「カスパー・ハウザーの謎」(74)、「ノスフェラトゥ」(79)、「フィッツカラルド」(82)、「緑のアリが夢見るところ」(84)、「コブラ・ヴェルデ」(88)、「彼方へ」(91) 。「フィッツカラルド」(82) でカンヌ映画祭監督賞を受賞。その特異な作風が世界の絶賛を浴びたニュー・ジャーマン・シネマの旗手である。

最新作は99年のカンヌ映画祭に出品された「キンスキー、我が最愛の敵」。また本作品で暴君な父親を演じているように、俳優としても多くの作品に出演している。出演作品としてレス・ブランクの「Burden of Dream」(82)、ヴィム・ヴェンダースの「Chamber 666」(82) (TV)、ポール・コックスの「Man of Flowers」(83)、ヴィム・ヴェンダースの「東京画」(85)、ピーター・フライシュマンの「Hard to be a God」(89) などがある。



エヴァン・ニューマン／クリス

エヴァンはニューヨーク市出身の19歳。俳優歴は5年になる。出演作は、「Guiding Light」、「Loving」、バリー・レビンソンの「Liberty Heights」(99) のシェルドン役。またコマーシャル出演も行っており、「メロー・イエロー」やラジオの「ハリウッドビデオ」のスポットもこなした。現在は、ニューヨーク州アルバニーのニューヨーク州立大学に通う学生である。



STAFF

スタッフ

ケイリー・ウッズ／プロデューサー

ウィリアム・モリス・エージェンシーで、ユマ・サーマン、監督のガス・ヴァン・サント、トッド・ソロンズなどのエージェントを務めたケイリー・ウッズは、その後2年間のソニー・ピクチャーズのスタジオ・エグゼクティブを経て、プロデューサーになった。新しい才能を発掘して育てあげクリエイターの新たな側面を引き出す彼の映画製作は、「KIDS」(95)のラリー・クラーク、「デンバーに死す時」(95)のギャリー・フレダー、「スクリーム」(96)のウェス・クレイヴン、「スウィンガーズ」(96)のダグ・リーマン、「コップランド」(97)のジェームズ・マンゴールド、「ガンモ」(97)「ジュリアン」(99)のハーモニー・コリンなどの成功で証明済である。

その他に主なプロデュース作品は、「ハネムーンは命がけ」(93)、「ルディ 涙のウイニング・ラン」(93)、「スリーサム」(94)、「オンリー・ユー」(94)「ビューティフル・ガールズ」(96)、「ゴジラ」(98)、などがある。

ロビン・オハラ、スコット・マコーレー／プロデューサー

ロビン・オハラとスコット・マコーレーは、ニューヨークをベースにした製作会社フレンジック・フィルムズを中心に活動しているインディペンデント・プロデューサーである。彼らはテレビ、映画など、多くの作品を手がけ、1998年にインディペンデント映画作りに貢献したとしてインディペンデント・フィーチャー・プロジェクト・ウエストによる、インディペンデント・スピリット賞のポロ・ラルフ・ローレン賞を受賞した。ハーモニー・コリンのデビュー作「ガンモ」(97)では共同製作者に名を連ねている。

主なプロデュース作品は「What Happened Was…」(94)、「The Wife」(96)、「カウチ・イン・ニューヨーク」(96)、「First Love, Last Rites」(97)、「Joe the King」(99)など。個人の活動では、オハラは、アラン・レネ、スビグニェフ・リプチンスキ、シャンタル・アケルマンなどの監督作品を製作。マコーレーは、製作だけではなく、アメリカのインディペンデント作品についての季刊雑誌の編集長も務めている。

ヴァルディス・オスカスドッチア／編集

アイスランド出身のヴァルディス・オスカスドッチアは、新聞や雑誌のカメラマン、フリーのライター兼カメラマン、ラジオ局の番組プロデューサー、フレドリック・トール・フリドリクソン監督作品「White Whale」などの長編映画の編集補佐、音響編集補佐など様々な仕事を手掛けた。その後1991年にデンマークのナショナル・フィルム・スクールを卒業し、アイスランドに戻り、長編映画や短編映画の編集マンとして、またアイスランド・テレビのニュース部の編集マンとして働き始めた。再び4年後デンマークへ戻り、長編映画の編集に携わっている。主な作品に、ジェスパー・W・ニールセンの「Forbidden for Children」、トマス・ヴィンターベアの「セレブレーション」(98)、ソーレン・クラウ・ヤコブセンの「ミフネ」(99)。本作品「ジュリアン」は、彼女がアメリカで編集した初めての作品である。

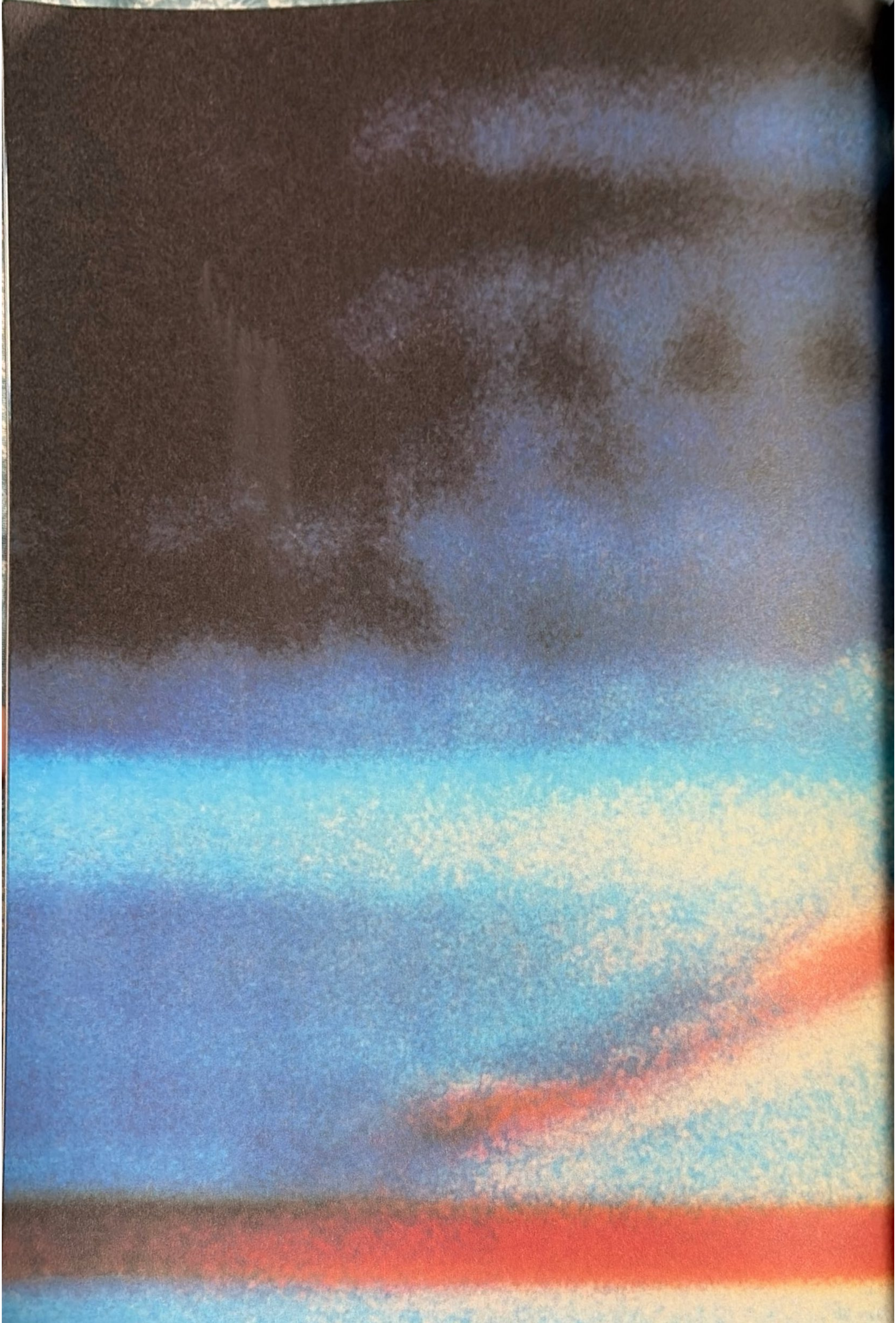
アンソニー・ドット・マントル／撮影

英国オックスフォードで生まれ。1990年から11の作品を撮影し、なかでも"ドグマ95"映画運動の一環として撮影され、カンヌ国際映画祭特別審査員賞受賞の「セレブレーション」(98)では絶賛を浴びた。「セレブレーション」(98)での小型携帯デジタルビデオカメラを使った独特な撮影のスタイルは、世界中の若いフィルムメーカーに刺激を与えることとなる。この後、同じくドグマ95の「ミフネ」(99)を撮影。その他の作品に「The Birthday Trip」(90)、「Operation Cobra」(95)、「Tranceformer: A portrait of Lars von Trier」(97)、「Bornholmsstemme」(99)などがある。

ブライアン・ミクシス／音響効果

ブライアン・ミクシスは、20本の長編映画、短編、テレビ番組の音響ミキサーを担当している。

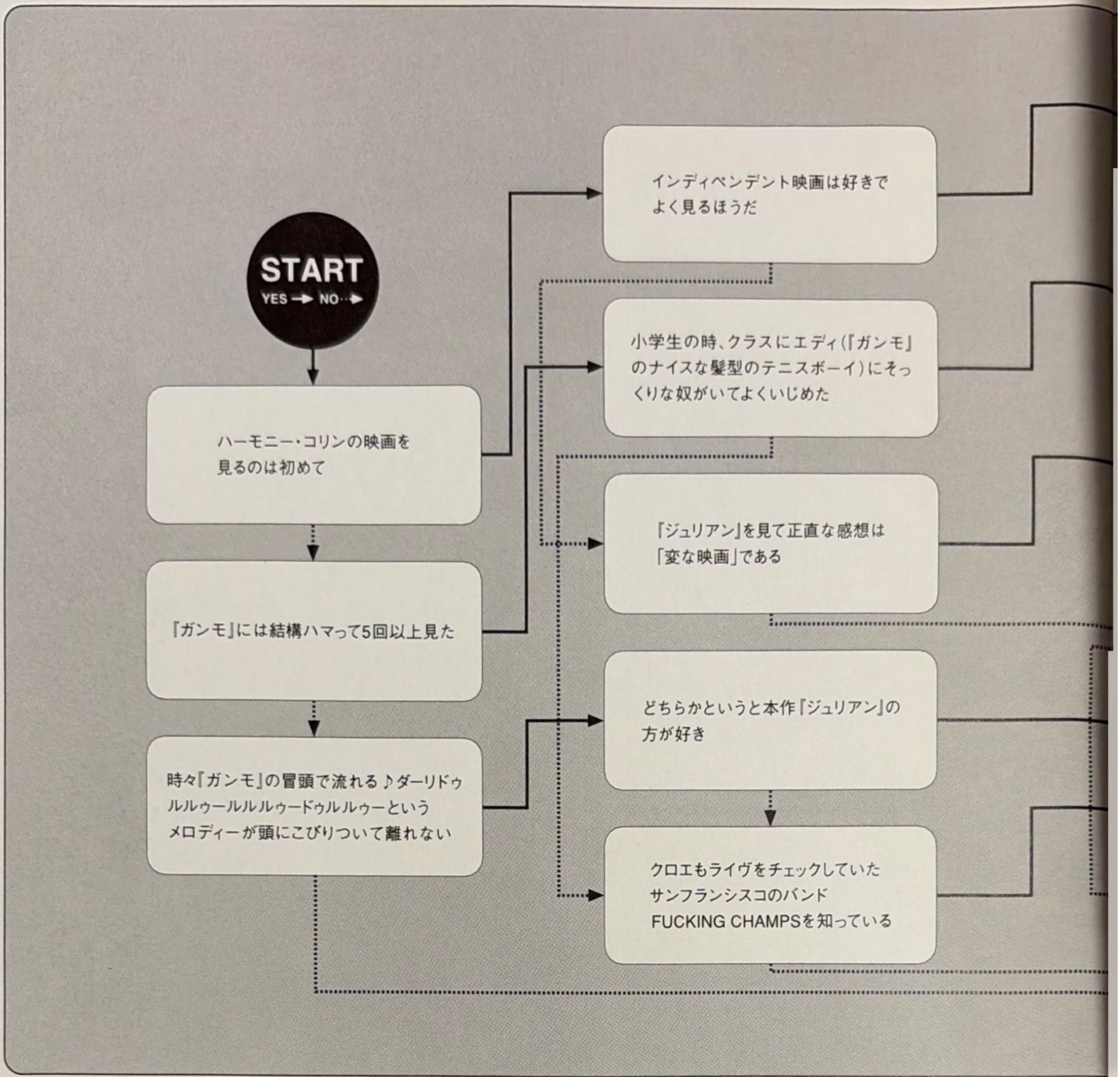
主な作品には、「ガンモ」(97)、「バッファロー'66」(98)、ジェシー・ペレッツの「First Love, Last Rites」(97)、ジェームス・トバックの「Two Girls and a guy」(97)、トニー・ブイの「季節の中で」(99)、M・ナイト・シャマランの「Wide Awake」(98)、アラン・ベルリネールの「Passion of Mind」、そしてギャリー・ウィニックの「The tic code」(98)などがある。





『ジュリアン』YES、NO 性格診断

シュガー吉永(バッファロー・ドーター、メタルチルクス/ミュージシャン)



弟クリスタイプ

厳格な父に育てられた平凡なあなたは生涯努力家たることを定められた運命。汗と苦労と血の滲むような努力によって、常に上のレベルを目指すことを課せられた人生の挑戦に終わりはない。世の中ほとんどの人がこの凡人クリスタイプだと言えるだろうが、一つだけこれは覚えておこう。凡人、努力やめたら凡人以下なり。

ラッキーアイテム:トラッシュ缶

ハーモニータイプ

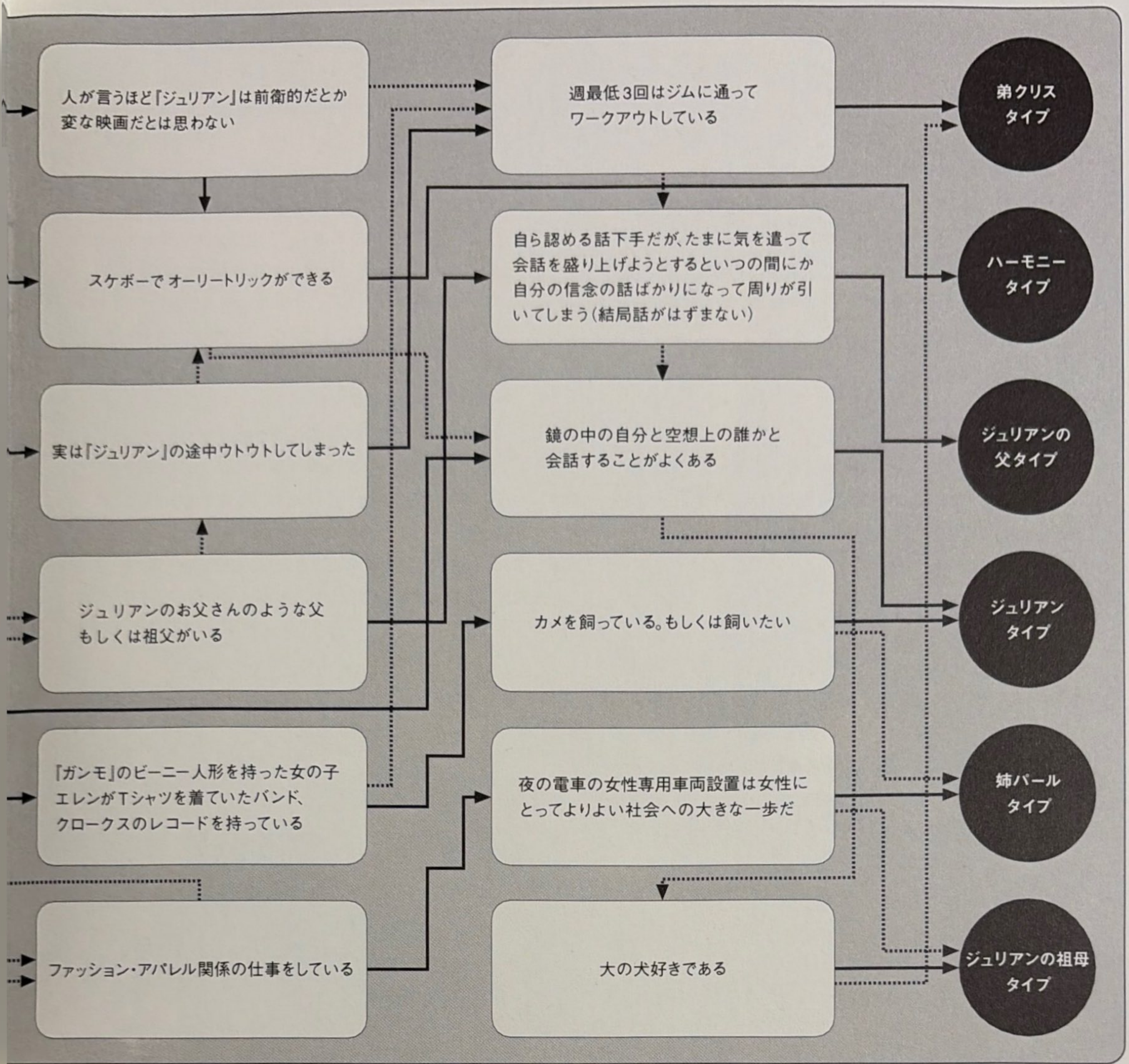
才能も運も味方につけたあなたは人にうらやまれる存在。一見、突飛でムチャなアイディアや斬新な切り口も実は卑近で普遍的な題材であるところが非凡の証。宇宙創生のビッグバンを語るより、彼(彼女)と過去2ヶ月にゴムなしでベッドに入ったのはいつだったか思い出した方が確かで現実的だし。このタイプ、彼氏彼女とくっついたり離れたりしながら長ーく付き合うでしょうの星が出ています。

ラッキー・アイテム:?

ジュリアンの父タイプ

スパルタで体育会系のあなたの辞書に「不可能」という言葉はありません。たゆまぬ努力と類まれなる精神力で不可能を可能にしてきたあなたは周囲の人達にも同じレベルを要求し、それがしばしば歪みと断絶を引き起こします。しかし、腰に手をやりながらコフシロップを一気飲みしてしまうという実はチャーミングな面を持つあなた。意固地にならずに時には固い心をほぐして優しく周りに微笑みかけてはどうでしょう。

ラッキー・アイテム:ウェディングドレス



ジュリアンタイプ

心優しいドリーミーなあなたは弱い者に対する思いやりに満ちています。しかし、世の中が優しさと残酷さの奇妙なバランスで成り立っているように、ある均衡が崩れた時、あなたも独裁者キング・ジュリアンとなり変わるのです。

ラッキー・アイテム：白のブラジャー

姉パールタイプ

母性そのものといえるあなたのあたたかい心は、心寂しき者をいつも優しく包み込みます。現代的な考え方を持ちながらも根が楽天的なあなたは、性差別などの問題に敏感でありながらも極端に思想追求型にはならず、呑気な印象を与えます。時には警戒することも必要かもしれません。

ラッキー・アイテム：ハープ

ジュリアンの祖母タイプ

古いしきたりと規律の社会を生きてきたあなたは従順なようで、実は厭世的。自分だけの小世界を楽しむあなたが外界と接触する時は実にマニュアル通り。周囲との摩擦を最小限に抑える術を知っているからで、このタイプの人は電車の中で急にニヤついたり、モノに名前をつけて会話したりすることも多々あるので、ひとり言で周りの人を怖がらせないように注意することも大切かもしれません。

ラッキー・アイテム：ドッグチェーン

REVIEW

ニューヨーク・タイムズ

眩いほどに光る狂気のなかで浮かび上がる映像。
ハーモニーがカサヴェテスの残酷なまでの写実主義的カメラワークをどこまで忠実に踏襲するつもりかはまだ読めない。しかし本作にはきちんとアヴァンギャルドな要素と写実的要素の両方が絶妙に織り交ざっている。フィルムの色合いの変化を見ればジュリアンの感情が見えてくる。

エンターテインメント・ウィークリー

『ジュリアン』でハーモニーは芸術的に大きく飛躍した。新たな感情表現の方法を発掘し、土台を固めつつあるハーモニーは、人を驚かせるだけの域を完全に脱した。

ロサンゼルス・タイムズ

突き刺すような美しさ、そして突き刺すような悲愴。
想像力豊かで、感性あふれるハーモニーは、斬新な手法で映画作りに成功している。ユエン・ブレンナーの迫真の演技も素晴らしい。一歩間違えれば非常に危険な映画になりかねない。しかし、この映画には彼の暖かで慈悲深いまっすぐな眼差しが感じられ、救いのある映画に仕上がっている。

スクリーン・インターナショナル

映像の常識を覆しそれぞれの世代に強烈な印象を与えたフィルムメーカーたちゴダール、ヘルツォーク、デレク・ジャーマン、フェリーニ、カサヴェテス・・・
彼らのオリジナリティは観客を興奮と陶酔へと導いた。
ハーモニー・コリン、彼もその一人になるだろう。

ベルナルド・ベルトルッチ

彼は映像表現の世界に革命を起こした。

Behind The Subtitle　石田泰子（イシダ・ヤスコ／字幕翻訳家）

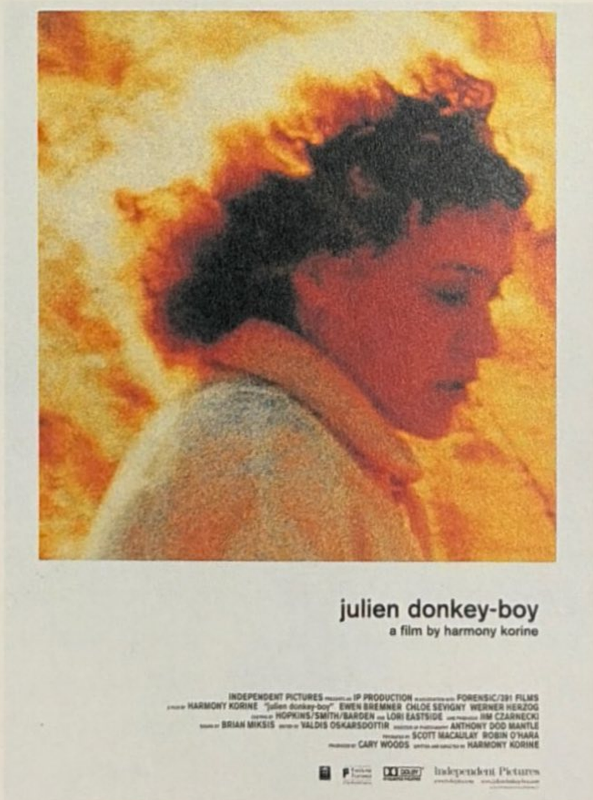
前作「ガンモ」に続き、今回も字幕翻訳を担当したが、ハーモニー・コリン監督の作品に字幕を付けるという作業は、ほかの作品の時とは違う困難を伴う。といっても、台詞で小難しい理屈を振り回すわけでも、物理科学の先鋭的理論が登場するわけでもない。むしろ宗教的ともいえるやさしさの漂う作品なのだ。ではどこか違うのか。それは、この作品そのものの持つ深みもさることながら、登場人物の生々しさゆえではないかと思う。

たとえば「ジュリアン」の登場人物は、精神分裂の青年、妊娠している姉、レスラーを目指す次男を異様なまでの執念で鍛え上げようとする父親、盲目の少女スケーター、両手がなく何でも足でこなす男・・・。誰もが均質さや脆弱さからは程遠い生身の、力強い肉体で、自己の感情やオブセッションに忠実に生きている。そして彼らの台詞も、単なる言葉ではなく、肉体の発するつぶやきといったふうで妙に生々しいのだ。

果して、この生々しさを字幕に写し取ることができたろうか。

その答えを求めて、また劇場に足を運ぼうと思う。

ORIGINAL POSTER



ジュリアン

料理：CUEL（山田 亮・ハギワラトシコ）
撮影：小泉佳春

グレーヴィーがけマッシュポテト
MUSHED POTATO WITH GRAVY

家にお母さんがいないなぁ・・・・のひと言が言えなくて、
かえって食卓を囲んでしまう。
あぁ、いない、いない、お母さんが・・・と泣けなくて、
かえって家庭的な料理を食卓に並べてしまう。

材料

じゃがいも、鶏の骨つきもも肉、ミックスベジタブル、バター、サラダ油、牛乳、塩、こしょう、砂糖、ベイリーフ、タイム

作り方

1. じゃがいもは塩ゆでして、熱いうちに皮をむいてよく潰す
2. 熱いうちにさらにバターを加え混ぜ、牛乳を混ぜる
3. 2を鍋にうつして、熱々になるまで火にかけ、火からおろして塩、こしょうをふり、再びバターを加えて溶かし混ぜる
4. 鶏肉に塩、こしょうをたっぷりふってすりこみ、タイムをふる
5. フライパンにサラダ油を熱し、フタをして鶏肉を表裏じっくり焼く
6. 鶏肉を取り出したフライパンを再び火にかけ、湯を注ぎ、焦げを煮溶かしグレーヴィーとする
7. 牛乳、バター、ベイリーフ、塩、こしょう、砂糖でミックスベジタブルを煮る
8. 皿にマッシュポテト、鶏、ミックスベジタブルを盛る。マッシュポテトには凹みをつくって、グレーヴィーを注ぐ





キャスト

ジュリアン：ユエン・ブレンナー
パール：クロエ・セヴィニー
ジュリアンの父：ヴェルナー・ヘルツォーク
クリス：エヴァン・ニューマン
ジュリアンの祖母：ジョイス・コリン
クリッシー：クリッシー・コビラク

スタッフ

監督・脚本：ハーモニー・コリン
キャスティング：ビリー・ホプキンス
スザンヌ・スミス、ケリー・バーデン
ローリー・イーストサイド
ラインプロデューサー：ジム・ツァーネック
音響効果：ブライアン・ミクシス
編集：ヴァルディス・オスカスドッチア
撮影：アンソニー・ドット・マントル
プロデューサー：ケイリー・ウッズ、スコット・マコーレー
ロビン・オハラ

CAST

Julien: Ewen Bremner
Pearl: Chloe Sevigny
Father: Werner Herzog
Chris: Evan Neumann
Grandma: Joyce Korine
Chrissy: Chrissy Kobylak

STAFF

Director & Writer: Harmony Korine
Casting Directors: Billy Hopkins
Suzanne Smith, Kerry Barden
Lori Eastside
Line Producer: Jim Czarnecki
Sound: Brian Miksis
Editor: Valdis Oskarsdottir
Director of Photography: Anthony Dod Mantle
Producer: Cary Woods, Scott Macaulay
Robin O'Hara

1999年ヴェネチア映画祭・トロント映画祭 正式出品作品
1999年／アメリカ映画／101分／スタンダードサイズ／ドルビーSR／原題：Julien Donkey-Boy
提供：株式会社東北新社・株式会社タキコーポレーション／配給：株式会社東北新社

ジュリアン 劇場用パンフレット／発行日：2000年12月23日／発行：株式会社東北新社 映画部 〒107-8460 東京都港区赤坂4-17-7 TEL.03-3584-6876
編集：小西啓介（東北新社）／デザイン：FISH DESIGN／印刷：多田印刷／定価：700円（税込み）※無断転載を禁ず



INDEPENDENT PICTURES PRESENTS AN IP PRODUCTION IN ASSOCIATION WITH FORENSIC / 391 FILMS
A FILM BY HARMONY KORINE "julien donkey-boy" EWEN BREMNER CHLOE SEVIGNY WERNER HERZOG
CASTING BY HOPKINS / SMITH / BARDEN AND LORI EASTSIDE LINE PRODUCER JIM CZARNECKI
SOUND BY BRIAN MIKSIS EDITED BY VALDIS OSKARSDOTTIR DIRECTOR OF PHOTOGRAPHY ANTHONY DOD MANTLE
PRODUCED BY SCOTT MACAULAY ROBIN O'HARA
PRODUCED BY CARY WOODS WRITTEN AND DIRECTED BY HARMONY KORINE